

## [2013/2014] 九州大学附属図書館研究開発室年報表 紙奥付等

<http://hdl.handle.net/2324/1470694>

---

出版情報：九州大学附属図書館研究開発室年報. 2013/2014, 2014-10. 九州大学附属図書館  
バージョン：  
権利関係：



# 平成 25 年度における研究開発

## 1 情報専門職の育成に関する調査研究

室 員	石田 栄美 (附属図書館研究開発室准教授)
	岡崎 敦 (人文科学研究院教授)
担当窓口	渡邊 俊彦 (図書館企画課長)
	久原 明美 (資料整備室長, 図書館専門員)

### <研究開発の概要>

図書館職員の専門性および次世代を担う情報専門職の育成をはかるための調査研究を行う。

### <研究開発の内容>

1. 福岡アメリカンセンターと大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻との共催講演会の開催  
平成25年8月30日(金)に、米国図書館協会(ALA)知的自由部部長/読書自由財団事務局長のバーバラ・M・ジョーンズ氏による講演会「デジタル時代を生き抜く!情報リテラシーの育成」を共催した。図書館職員12名も参加し、米国の情報リテラシー育成の現状や取り組みなどを把握した。
2. 大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻のインターンシップ生の受け入れ  
平成25年度は、2名を受け入れた。図書館における資料保存というテーマを希望した学生は資料整備室所属の研究開発室資料保存班の職員が、図書館の電子書籍出版社の関係の検討について希望した学生は図書館企画課が、それぞれ受け入れた。インターンシップ終了時には、レポート執筆の指導、成果発表会の企画・運営をおこなった。
3. 大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻PTLII成果発表会への参加  
平成25年7月29日(月)に、ライブラリーサイエンス専攻の科目「PTL II」の学生成果発表会が開催された。「特定主題に関する情報源の一元提供 ～長崎「原爆」資料と山本作兵衛コレクションを題材として～」と題した学生からの発表があり、その後、ライブラリーサイエンス専攻の学生・教員とともに、図書館職員4名も参加し、質疑応答、ディスカッション、意見交換などをおこなった。

## 2 国内外の図書館間連携および新図書館計画に関する調査研究

室 員	吉田 素文 (附属図書館副館長, 医学研究院教授)
	石田 栄美 (附属図書館研究開発室准教授)
	堀 賀貴 (人間環境学研究院)
	松原 孝俊 (韓国研究センター教授)
職 員	北島 光朗 (利用支援課資料サービス係)
担当窓口	松石 健祐 (図書館企画課企画係長)

### <研究開発の概要>

研究・開発分野での大学図書館間の連携をすすめるとともに、新図書館に必要とされる図書館機能と、それを実現するための施設設備・サービスに関する調査研究を行う。

<研究開発の内容>

1. 新中央図書館基本計画検討ワーキンググループにおける検討（堀）

関係部局教員を委員とする新中央図書館基本計画検討ワーキンググループ（座長：堀教授）を組織し、計17回の検討を行った。平成25年度は主に平面計画の確定をめざし、図書館職員による検討チームのほか施設部、設計事務所との緊密な連携のもと、利用者スペース、収蔵スペース、事務スペース等の機能的な配置を検討し、設計をすすめた。

2. 「大学学習資源コンソーシアム」の設立準備（吉田）

大学間連携のもと、電子的学習資源の制作、共有化促進、教材作成における著作物の利用環境整備等を行うことを目的とした「大学学習資源コンソーシアム（略称：CLR）」の設立準備をすすめ、著作権の利用に関するガイドラインの検討等を行った。

### 3 マーケティングおよび新サービスの創出に関する調査研究

---

室員	馬場 謙介（附属図書館研究開発室准教授）
	池田 大輔（システム情報科学研究院准教授）
	藤崎 清孝（システム情報科学研究院准教授）
	伊東 栄典（情報基盤研究開発センター准教授）
	森 雅生（大学評価情報室准教授）
	南 俊朗（附属図書館研究開発室特別研究員，九州情報大学教授）
	井上 創造（附属図書館研究開発室特別研究員，九州工業大学准教授）
職員	井川友利子（利用支援課サービス企画係）
担当窓口	堀 優子（利用支援課サービス企画係長）
	野原ゆかり（伊都地区図書課利用サービス係長）

<研究開発の概要>

利用状況の分析を基にした図書館マーケティングと、それを活用したサービス・利用環境の改善、新たなサービスの創出に関する研究開発を行う。

<研究開発の内容>

○図書館業務への活用を目的としたRFIDシステムの基本性能評価（藤崎）

無線技術を用いたRFID (Radio Frequency IDentification) システムを、図書館業務に活用することを目指し、昨年度に引き続き、RFIDシステムの基本性能の評価を行った。今年度は、金属板が、卓上リーダの直下ではなく、その周辺にある状況を想定し、タグの読み取り性能にそれが与える影響を評価した。具体的には、金属製の机の上に穴を開け、卓上リーダを埋め込んでいるような状況や、卓上リーダが金属製の壁に近接しておかれている場合を想定し、周辺にある金属板の影響を評価した。卓上リーダSOFEL製ST-RW01を用いて実験を実施したが、このリーダは筐体の外側から3cmほど内側にアンテナが取り付けられていたため、金属板の明確な影響を確認することができなかった。この結果より、13.56MHz帯を用いるRFIDシステムの場合、少なくとも金属板とアンテナ間を3cm離せば、仕様通りの性能を出せる可能性がある。今後、このリーダを改造し、アンテナと金属板の距離を更に近づけ、金属板がリーダの性能に与える影響を評価していく。

○機関リポジトリの検索ログ解析による、検索語提案アルゴリズムについての研究（池田）

これまでの研究から、機関リポジトリへのアクセスの多くを非研究者が占めていることが強く示唆されている。しかし、専門用語が多い機関リポジトリ中の適切な文献へ非研究者が到達することは容易ではない。そのため、機関リポジトリ(QIR, HUSCAP, BARREL)とCiNiiの検索ログを解析し、学術文献に特化した検索

語の提案アルゴリズムについて研究を行い、国際会議で発表し、その後論文誌に掲載した。この研究の副産物として、最近の機関リポジトリへのアクセスがロングテールではなくなっていること、アクセスに用いられる検索語が機関リポジトリの質的な特徴を表している可能性が示唆された。これらは今後の研究課題である。

#### ○利用者ニーズ把握のための質的調査の実施（堀・井川）

利用者ニーズの把握を目的に、附属図書館の25年度計画の取り組みの一環として、選書に関する学生インタビュー調査及び留学生へのアンケート調査を実施した。それらの調査結果を基に、26年度、利用状況等の量的調査及び分析を行う予定である。

##### 〔調査概要〕

#### ①選書に関する学生インタビュー調査

時期:26年3月

対象:文系・理系の学部生・院生10名

方法:1対1のインタビュー形式。各1時間程度

#### ②留学生へのアンケート調査

時期:25年9-12月

対象:九州大学に在籍する留学生（正課生・非正課生とも）

方法:質問紙及びウェブアンケートによる（それぞれ日本語・英語） 無記名式

回答数:114件

## 4 資料保存に関する調査研究

---

室員	三輪 宗弘（附属図書館付設記録資料館教授）
職員	中尾 康朗（利用支援課文献流通サービス係長）
	原賀可奈子（資料整備室図書受入係）
	羽賀真記子（資料整備室図書目録係）
担当窓口	小柳 貴俊（利用支援課資料サービス係長）

### <研究開発の概要>

本学が所蔵する資料の保存・管理体制に関する調査研究を行う。

### <研究開発の内容>

#### 1. 生物被害の調査と対策

前年度に引き続き、シバンムシを中心とした生物被害の調査および対策を実施した。

試行段階を経て手順が確立した作業について、研究開発室としての取り組みから図書館の業務へ組み込む方向で進めている。

標本室の害虫発生について総合研究博物館と対策を協議し、対応を依頼した（6月）

##### 〔調査〕

- ・前年度同様にトラップ調査および温湿度調査を実施（中央図書館、伊都図書館（温湿度調査のみ））
- ・中央図書館においては、前年度は試行でもあり資料保存班員で調査を行ったが、25年度からは資料サービス係の業務に移行。

##### 〔対策〕

#### <直接的な対策>

- ・虫害：薬剤散布（ブンガノン）による殺虫処理（中央図書館貴重書室）
- ・カビ、埃：アルコールによる拭き取り（中央図書館保存書庫、伊都図書館学位論文書庫）

<環境整備>

- ・忌避剤設置（中央図書館貴重書庫：5月）
- ・通風口に網設置（中央図書館貴重書庫等：6月）
- ・移転に向けた保存書庫/書架の清掃及び資料のカビ・埃の除去作業の定例化：毎月定期的に全館の職員の協力を仰ぐ形での実施（中央図書館保存書庫：6月より）
- ・スリッパ設置による入室手順の変更（6月）
- ・標本室の清掃，バポナ設置（9月）
- ・標本室天井の通風口に網設置，壁の通気口に緩衝材での目張り（10月）

2. 全国図書館大会における事例報告

福岡で開催された第99回全国図書館大会の第10分科会（資料保存）

「カビ・ムシ・ヒト」から資料を守る－IPM(総合的有害生物管理)を図書館に」において，九大図書館での取り組みについて「IPM管理を目指して九州大学附属図書館の取り組み」と題して事例報告を行った。

3. LSS インターンシップの受入

統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻の大学院生（修士）のインターンシップを受け入れた。

「貴重資料の長期保存計画の検討」というテーマ設定で，実情を踏まえた調査や実際の清掃活動など，館内での作業に取り組んでもらったほか，全国図書館大会の資料保存分科会にも参加いただいた。

4. 田嶋記念財団への申請

新図書館移転に向けての資料保存対策として，マイクロ資料の劣化度調査を行い，田嶋記念財団へ「マイクロ資料保全対策事業」の助成金申請し，採択された。本事業の取り組みは26年度となる。

5. 今後の課題

- ・移転に向けたマイクロ資料の保存対策，継続的な環境整備（清掃等）
- ・各書庫のトラップ調査及び温湿度調査の定期的なデータの整理・分析

## 5 学習・教育支援に関する調査研究

---

室員	吉田 素文（附属図書館副館長，医学研究院教授）
	富浦 洋一（システム情報科学研究院教授）
	池田 大輔（システム情報科学研究院准教授）
	井上 仁（情報基盤研究開発センター准教授）
	山田 政寛（基幹教育院准教授）
	森 雅生（大学評価情報室准教授）
職員	堀 優子（利用支援課サービス企画係長）
	井川友利子（利用支援課サービス企画係）
	北島 光朗（利用支援課資料サービス係）
	詫間沙由香（医学図書館受入目録係）
	大村 武史（伊都地区図書課企画運営係）
担当窓口	渡邊由紀子（利用支援課長）

<研究開発の概要>

九州大学における学習・教育活動と連携した新たな教育支援のあり方について調査研究を行う。

<研究開発の内容>

## 1. 「大学図書館による自律的学修支援体制の構築」の取り組み（吉田，井上，山田，職員）

「平成25年度九州大学教育の質向上支援プログラム（EEP）」において、「大学図書館による自律的学修支援体制の構築」の取り組みが採択された。

本取り組みは、附属図書館がこれまで構築を進めてきた学術情報基盤を最大限に活かし、ライブラリーサイエンス専攻等の関係部局との組織連携を深めつつ、本学の目指す姿である「アクティブ・ラーナーを育成する大学」の実現に貢献することを目的とするものである。

平成25年度は、大学図書館を中心とした学修支援体制をより強固なものとするため、附属図書館とその付設教材開発センターおよび統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻が一体となって主に以下の事業を推進した。

### 1) 学生との協働による学習支援プログラムの充実と発展

平成24年度までは中央図書館のみであった図書館学習サポーター（Cuter）を伊都図書館、嚶鳴天空広場、医学図書館にも配置した。また、全学教育の新入学生サポーターの研修会で図書館学修サポーターの紹介を行うなど、学内の他のピアサポートと今後互いに協力を行っていくことを確認した。

### 2) 自律的学修支援を推進する人材開発

アクティブラーニングに対する意識とスキルの向上を目指し、ワークショップと講義からなる研修プログラムを企画し、本学附属図書館職員14名を対象とした研修を実施した。また、図書館間学術交流協定を締結しているイリノイ大学図書館よりLisa Hinchliffe氏を講師に招き、ワークショップ「アクティブラーナーに向けた学習支援」を開催し、学内外から30名の参加を得た。

### 3) 基幹教育との連携

LibGuidesによる授業ガイドを基幹教育の教員と共同で作成し、図書館での授業外学修支援の可能性について検討を行った。また、基幹教育の授業で用いられる課題・参考文献の情報にもとづき、伊都図書館に課題文献コーナーを整備した。

新入生向けの図書館ガイダンスについては、九州大学Web学習システムでも提供できるよう、その内容を電子教材として再構成した。また、スマートフォンをプラットフォームとした図書館活用に関するアプリケーションの開発に取り組んだ。

### 4) 効果的な学修支援を推進するための各種調査

学習支援で注目される各大学を訪問し、ライティングセンターや学習スペース、学生チューター資格制度、学生協働の取り組みなどについて聞き取り調査を行った。この調査をもとに、各大学における学習サポート体制の特徴を整理し、本学における方向性を検討するための基礎資料を作成した。

### 5) 電子教材の拡充と利用促進

LibGuidesに26件の学習ガイドを新たに作成し、全体で47件のガイドを提供した。これらのガイドには学内外から合計5万回を超えるアクセスがあった。また、BlackboardやHandbookなど電子教材作成ツールに関する各種講習会を実施した。

### 6) ライブラリーサイエンス専攻における教育・研究との連携

ライブラリーサイエンス専攻のゼミにおいて、2000年以降に発表された電子教材に関する既往研究の文献調査を実施し、様々な側面から利用動向を整理した。また、ライブラリーサイエンス専攻の科目「レファレンスサービス論」において、LibGuidesを使ったパスファインダー作成実習を実施した。

### 7) 成果の逐次発信

本取り組みを外部に発信するためのウェブサイトを作成して公開するとともに、学会や講演会等で積極的に成果を発表した。

## 2. 初年次教育と連携した授業への取り組み（職員）

平成24年度に引き続き、21世紀プログラム（以下「21cp」という）の一年次コアセミナーと連携した授業実践「よむつたえる」に取り組んだ。2年目の平成25年度は、21cpの特色と課題を踏まえ、各自のテーマを客観的に説明できるようになること、図書館を活用して自らのテーマを掘り下げることができるようになることを目的として、以下の内容を実施した。

### 1)6/6, 6/13：ビブリオバトルの練習試合

- 2)6/27, 7/4 : オンデマンド講習会「図書館ゼミ」を実施。各自のテーマに沿った文献検索演習を、実際に伊都図書館で本を入手するところまで行った
- 3)7/11 : ビブリオバトルで紹介する本の書評執筆
- 4)7/18, 25 : ビブリオバトル本選。各自のテーマに関する本を紹介
- 5)8/3 : 21cpオープンキャンパスの企画として、ビブリオバトルの決勝戦を中央図書館きゅうとcommonsで実施。書評も同時展示
- 6)前期終了時に21cp学生へのアンケートを実施。当初の目的がある程度達せられたことが確認できた

### 3. 授業に特化した掲示板システムの開発 (池田)

従来、授業の評価は学期末のアンケートのみであった。これに対し、ICT技術を用いて、受講者の多寡によらず、即時のフィードバックを得ながら授業を進めることを目的に、授業に特化した掲示板システムを開発した。大人数(150前後)と中人数(50前後)の講義で実際に使い、受講者からも好評であった。また、掲示板のログを元に、授業に対し不満を持つ受講者を特定し、授業の劇的な改善につなげた。

### 4. 機関リポジトリを活用した大学別発信型語彙リストのオーダメイド作成法 (冨浦)

英語の確実な運用には、基本的な語彙や表現の習得が欠かせない。学術語彙や表現は、一般目的の英語のそれに比べ大きく変わることが知られており、その収集が重要な課題となっている。実際には、大学などの機関単位でも、取り扱っている研究領域や教学・研究組織が異なることから、究極的には各機関で整備されることが望ましい場合もあり、実際にいくつかの大学ではそういった資料が出版されている。しかし、それには大変な労力を要する。

本研究では、近年、主要研究機関が構築しつつある機関リポジトリを、そういった資料を作るための基本的な言語資源として捉え、効率よく作成するための枠組みを研究・提案している。平成25年度は、九州大学の機関リポジトリを例に学術表現を抽出するための基本的な手法の実装やその試作を行い、さらに補足的な資料をインターネットから収集するような試みを行った。

## 6 教材開発および著作権処理に関する調査研究

室 員	岡田 義広 (附属図書館付設教材開発センター教授)
	吉田 素文 (附属図書館副館長, 医学研究院教授)
	井上 仁 (情報基盤研究開発センター准教授)
	黒澤 節男 (附属図書館研究開発室特別研究員)
職 員	中尾 康朗 (利用支援課文献流通サービス係長)
担当窓口	渡邊 俊彦 (図書館企画課長)

#### < 研究開発の概要 >

インストラクショナルデザインに基づいた教材、教育方法の研究開発と、教材作成にかかる著作権処理問題について調査研究を行う。

#### < 研究開発の内容 >

##### 1. 「インタラクティブ教材の開発と知の公共化による能動的学習推進事業」の取り組み

平成24年度に開発した教材のテンプレートや開発ツールを利用して、理系科目を中心に、教材開発を進めた。文系科目に関しては、当該部局と連携して電子教材開発の需要の調査とともに教材開発支援のための講習会を実施したほか、歴史学等の科目において、歴史資料等の電子データ化を進めた。また、仮想現実感(VR: Virtual Reality)、拡張現実感(AR: Augmented Reality)、複合現実感(MR: Mixed Reality)技術を用いた電子教材テンプレートや開発ツールの開発を行った。その他、九大看護部の看護実践力プロッサム開花プロジェクト(平成21年度文部科学省大学改革推進事業採択課題「看護師の人材養成システムの確立」)と連携した対話型

学習教材の開発および、総合研究博物館と連携して、電子教材開発の素材となる博物館資料の電子データ化や電子博物辞典等の教材開発の検討を進めた。

## 2. 「病院地区における3D教材の開発および開発・提供体制の構築」の取り組み

「平成25年度九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト(P&P)」が平成24年度から継続して採択された。本プロジェクトは、教材開発センターが行う全学における教材の開発支援と教材の提供体制のモデルケースとして、病院地区における3D教材の開発および開発・提供体制を構築する目的で取り組んだものである。平成25年度は、ゲーム要素を取り入れた細菌学の学習教材を、教員と学生の協働により開発した。学生のモニタリングの結果、本プロジェクトで開発した教材は細菌学に興味を抱かせ学習意欲を高める効果があることが分かった。今後において、医学系科目に限らず、文系科目等についても同様の結果が得られるものと期待できる。

## 3. 電子教材著作権処理に係る取り組み

録画した講義や学習資料等を電子教材としてウェブで共有したりネット配信したりするとき、教材に「他人の著作物」が含まれていると、著作権への配慮が必要となる。教員が作成した電子教材の授業利用やネット配信する際の著作権処理の考え方等を共有する目的で、電子教材著作権講習会を積極的に開催した。平成26年3月には、「大学教育における他人の著作物を含む電子・オンライン教材の作成と利用に関するQ&A」の第2版を発行した。また、学習資源の制作と共有の環境構築を目指して設置された「大学学習資源利用モデル研究会」（平成24年9月に任意団体として設置）に、吉田室員もメンバーとして参加し、著作物の利用に関するガイドラインの検討、著作権管理団体との協議等に取り組んだ。本研究会は、平成26年度には大学が公式メンバーとなる「大学学習資源コンソーシアム」として設立される予定である。

## 7 コンテンツ形成に関する調査研究

---

室員	川平 敏文（人文科学研究院准教授） 中里見 敬（言語文化研究院准教授） Wolfgang Michel（附属図書館研究開発室特別研究員） 三輪 宗弘（附属図書館付設記録資料館教授）
職員	中尾 康朗（利用支援課文献流通サービス係長） 山根 泰志（図書館企画課企画係） 相部久美子（医学図書館閲覧係） 梶原 瑠衣（医学図書館参考調査係） 宮嶋 舞美（情報システム部情報基盤課デジタルライブラリ担当） 古賀 京子（伊都地区図書課参考調査係）
担当窓口	久原 明美（資料整備室長，図書館専門員） 諸岡 静児（文系合同図書室長，図書館専門員） 井ノ上俊哉（医学図書館専門員） 星子 奈美（eリソースサービス室リポジトリ係長）

### <研究開発の概要>

九州大学が所蔵する貴重資料、コレクション等について、その由来や内容、価値等の調査を行うとともに、その画像及び書誌データベース作成についての調査研究を行う。

### <研究開発の内容>

#### 1. 雅俗文庫目録の公開

21年度に受け入れた中野三敏名誉教授の旧蔵書である「雅俗文庫」について、川平敏文室員の指導のもと、



人文科学研究院の大学院生とともに25年度も継続して書誌情報の採取・データ入力を実施し、書誌採取の済んだものについては「九大コレクション」で簡易目録を公開している。今後配架場所等を決定し、図書館システムへの登録を順次進めて行く予定である。

## 2. 濱文庫所蔵唱本目録作成

本研究班では、濱文庫所蔵唱本について詳細な冊子体目録を作成しながら、将来的に電子目録を公開できるよう、フォーマットに則りデータ等を蓄積している。その成果は紙媒体以外に、九州大学学術情報リポジトリでも公開し、学内外へ広く発信している。

今年度は、「濱文庫所蔵唱本目録稿（七）」を『九州大学附属図書館研究開発室年報』2012/2013に、「濱文庫所蔵唱本目録稿（八）」を『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第18集第1号に、「濱文庫所蔵唱本目録稿（九）」を『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第18集第2号に、「濱文庫所蔵唱本目録稿（十）」を『言語科学』第49号に、「濱文庫所蔵唱本目録稿（十一）」を『言語文化論究』第32号にそれぞれ掲載した。

なお、本目録稿は『日本中国学会報』第65集（2013年）の「学界展望」欄（岡崎由美・早稲田大学教授執筆）で取り上げられた。

## 3. 箱崎地区医学部所蔵資料の調査

箱崎キャンパスの伊都地区移転を控え、医学図書館では箱崎地区の旧工学部4号館に保管されている医学部所蔵の未登録資料を馬出地区へ移転することが課題になっている。この課題に取り組むため、室員のウォルフガング・ミヒェル先生のご指導の下、本事項参加職員を中心に、資料調査を進めた。

旧工学部4号館にて現場調査をし、6室に約1740箱のダンボール箱と、書架約100棚に配架されている資料の存在を確認した。

25年度は、同館209号内部屋に保管され「貴重」、「宮入文庫」と記載されていたダンボール箱65箱のみ医学図書館「多目的室」に移転した。「宮入文庫」68冊については目録登録をし、医学図書館貴重図書室の「宮入文庫コーナー」に配架した。「貴重」資料に関しても順次目録整理される予定である。

## 6 学術情報の流通および発信に関する調査研究

室 員	馬場 謙介（附属図書館研究開発室准教授）
	吉田 素文（附属図書館副館長、医学研究院教授）
	荒木啓二郎（システム情報科学研究院教授）
	竹田 正幸（システム情報科学研究院教授）
	富浦 洋一（システム情報科学研究院教授）
	池田 大輔（システム情報科学研究院准教授）
	田中久美子（システム情報科学研究院教授）
	廣川佐千男（情報基盤研究開発センター教授）
	森 雅生（大学評価情報室准教授）
	黒澤 節男（附属図書館研究開発室特別研究員）
職 員	小柳 真弓（eリソースサービス室リポジトリ係）
担当窓口	星子 奈美（eリソースサービス室リポジトリ係長）

### <研究開発の概要>

九州大学が蓄積する学術情報資源をより効果的に発信するために、学術情報リポジトリ（QIR）等の発信機能の高度化、システム間連携、検索システムに関する研究開発を行う。

### <研究開発の内容>

1. 「著作権処理状態管理・教員問合せ 統合システム」の運用

平成22～24年度に開発した上記システムを用いて、学内研究者へ電子メールを送付、リポジトリへの論文登録を促した。

上記システムは、学術論文データベースから本学の研究者による論文を検索し、それら論文のQIRへの登録を著者に電子メールで促すものである。平成25年度は、本学の研究者により発表された学術論文を検索した結果のうち、著者の連絡先メールアドレスが判明し、かつ、論文の出版社がリポジトリでの公開を認めているものについて、メール送付を実施した。

## 2. 機関リポジトリのクラウド化

機関リポジトリのクラウド化を目指し、従来から開発してきたクラウド上の個々のリポジトリをカスタマイズできるようなシステムSarabiWekoの開発をさらに進め、国際会議、論文誌で発表した。

これまでの研究から、機関リポジトリへのアクセスの多くを非研究者が占めていることが強く示唆されているが、専門用語が多いため適切な文献を非研究者が探すことは容易ではない。そのため、機関リポジトリの検索ログを解析し、学術文献に特化した検索語の推薦アルゴリズムを構築した。

コンテキストを考慮した情報検索を可能にするために、文書と同様、コンテキストをベクトル空間内のベクトルとして表し、コンテキストベクトルによって文書を「歪める」手法を提案し、国際会議、論文誌で発表した。

## 3. 機関リポジトリを活用した潜在的研究クラスタの創出

機関リポジトリに登録されている、その組織の研究者の論文を分析し、共同研究の可能性がある研究者対を、その根拠を示す第三者の論文と共に提示し、共同研究を斡旋するコーディネータ（リサーチアドミニストレーター）を支援する研究を進め、学会発表をおこなった。